

前田家の歴史

初代より前	下之一色村城や荒子城（ともに愛知県名古屋市内）の城主、前田縫殿助（のちの加賀前田家の一族）の三男、前田美濃守が諸國を歴遊し、肥前彼杵の大村氏の客となっていた。武雄の後藤資明が招き、佐留志（佐賀県江北町）に領地を与えた。前田美濃守の子、前田新右衛門は、伊万里郷大川内村に居を構え、小庄屋を務めた。
初代	元和年中（1615～1624）、前田新右衛門の子、前田作右衛門が伊万里郷町裏村に居を構え、寛永十九年（1642）まで大庄屋を務めた。
二代	寛永二十年（1643）から天和二年（1682）まで前田善五左衛門が大庄屋を務めた。初代、有田皿山代官だった山本神右衛門重澄の後妻になった前田作右衛門（初代）の娘が万治二年（1659）六月十一日男子を生んだ。この子がのちに『葉隠』の口述者となる山本神右衛門常朝である。
三代	天和三年（1683）から元禄十年（1697）まで前田卯右衛門が大庄屋を務めた。
四代	元禄十一年（1698）から延享元年（1744）まで前田作右衛門高廣が大庄屋を務めた。 宝永五年（1708）閏正月に町裏村が岩栗神社に建立した鳥居（現在は伊萬里神社にある）に「前田作右衛門高廣」の名がある。 享保十六年（1731）に町裏村が香橘神社へ寄進した鳥居（現在は伊萬里神社にある）に「大庄屋 前田作右衛門」の名がある。
五代	延享二年（1745）から天明三年（1783）まで前田善五左衛門利壽が大庄屋を務めた。 安永三年（1774）から天明五年（1785）まで善五左衛門利壽と粹の新蔵（のちの六代、前田作右衛門利富）は有田郷大庄屋の藤山覚左衛門らとともに八谷嶺の干拓をすすめた。 天明四年（1784）、善五左衛門利壽の最晩年に前田家住宅が建築された。
六代	天明四年（1784）から文化八年（1811）まで前田作右衛門利富が大庄屋を務めた。 寛政十二年庚申（1800）十月十五日に、作右衛門利富と妻の豊が願主になり、伊万里付近の有力者や報身寺の檀家とともに、城山に三界萬靈塔を建立した。 文化元年（1804）前田作次郎（のちの前田萬里（1804～1866））が生まれた。
七代	文化八年（1811）から文政十二年（1829）まで前田善五左衛門利應が大庄屋を務めた。 文政二年（1819）八月、善五左衛門利應が岩栗神社へ燈籠（現在は伊萬里神社にある）。大正十四年（1925）に十一代、前田雄次郎が修繕）を寄進した。
八代	天保元年（1830）から天保九年（1838）まで前田作右衛門伊兵衛が大庄屋を務めた。
九代	天保十年（1839）から文久元年（1861）まで前田善五利昭が大庄屋を務めた。 天保十三年壬寅十月、岩栗神社へ寄進された鳥居（現在は伊萬里神社にある）に「伊萬里郷大庄屋 前田善五利昭」の名がある。
十代	文久元年（1861）、前田庸之助利之が代大庄屋になった。 明治二十二年（1889）から大正五年（1916）まで前田庸之助が初代、大坪村長を務めた。

前田家住宅

前田家住宅は立花町西門蔵寺地区にあります。前田家は、江戸時代に代々、伊万里郷の大庄屋をつとめました。屋敷地は南北に細長く、約1,000坪ほどあります。

主屋は、そのほぼ中央にあり、江戸時代後期の天明四年（1784）頃に建てられたものです。南を正面とし、西側を道路に接しています。長屋門はありません。寄棟造一部二階建て、建築面積約291m²と民家建築では県内でも最大規模です。屋根は茅葺で、佐賀県の民家の特徴づける「くど造り」の最も発達した姿を伝えています。

そのほか東の蔵と西の蔵は18世紀の末頃、北の蔵は明治時代後期に建てられたものです。それぞれ切妻造二階建椽瓦葺で、建築面積は東の蔵が約51m²、西の蔵は約139m²、北の蔵が約61m²です。新小屋も明治時代後期に建てられました。木造平屋建て建築面積は約30m²です。水車小屋は江戸時代後期に建てられ、明治時代後期に改造されています。木造平屋建て建築面積は約57m²です。屋根はすべて瓦葺です。

各々の建物が建築学上でも高く評価され、また伊万里郷の大庄屋をつとめたほどの大規模民家の施設の全体構成や機能を知る上で貴重です。



※個人のお宅です。建物内部は公開されていません。

大坪公民館

〒848-0021 佐賀県伊万里市大坪町甲2863番地1
TEL 0955-23-9898 FAX 0955-23-1093

くにとうろくゆうけいぶんかざいけんそうぶつ
国登録有形文化財建造物

22世紀に残す佐賀県遺産

いまりごうおおじょうや
伊万里郷大庄屋

前田家住宅



現在の前田家住宅（主屋）



昭和3年（1928）9月 庭から見た自宅座敷



前田家庭園（湧園）



1 ニワ①

土間をニワといいます。ふだん人びとが入り出る玄関につづくニワは公的スペースだったので、高い天井があります。つづく四畳のオモテ(表)で、ふだんの来客の対応が行われました。天井が高く檜縁天井になっており、家の守り神がまつられた神棚があります。



2 イノマ(八畳)

イノマ(居の間)は前田家の主人や家族がふだん生活する部屋です。伊万里出身の天才的俳人、中村鼎山の聯がかけられています。この部屋や、寝室だったヨジョウノマ(四畳の間)、ナンド(納戸)とも天井が低く、根太がむき出しになっています。



3 ツキノザシキ(八畳)

ツキノザシキ(次の座敷)は大庄屋と同格以下の客の対応につかわれました。現在は、ここに先祖の位牌がまつられています。ザシキ(座敷)との境の鴨居には、小城出身の書家、中林梧竹の「成功盛徳」の扁額がかけられています。欄間は松と竹で、天井は高い、檜縁天井です。ザシキ(座敷)やオナリノマ(御成りの間)も同様に高い檜縁天井になっています。



4 茶室(六畳)

明治時代以降に改造され、現在は、数寄屋造りの風流な部屋で茶室になっています。床の天袋には、中国から長崎に来ていた画家、王治梅の筆で太湖石が描かれています。この部屋は、かつて特別な客を迎えるための式台付きの玄関であったと考えられます。



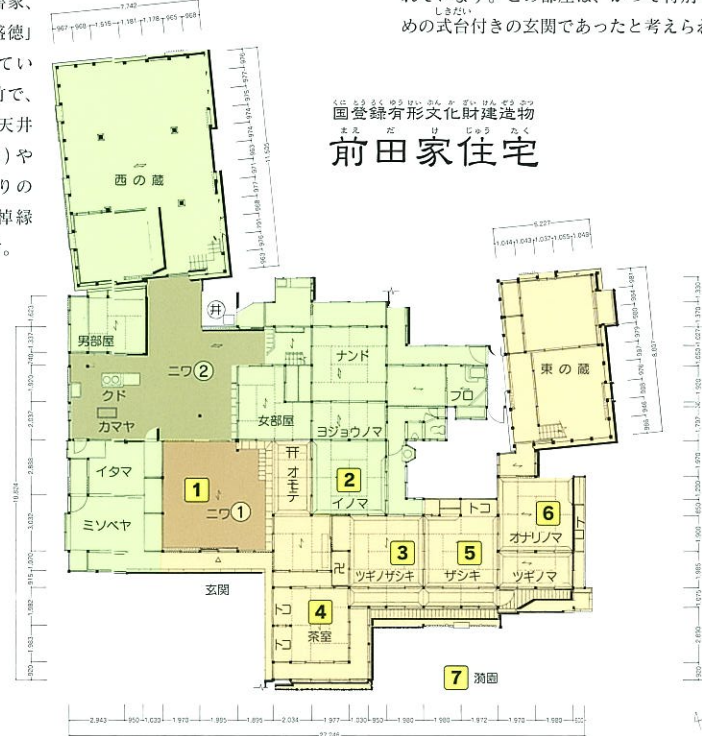
5 ザシキ(八畳)

式台付きの玄関から上がった客は、樽縁を通ってザシキ(座敷)に通されました。ザシキは大庄屋と同格以上の特別な客の対応につかわれました。釘隠し金具は前田家の家紋の「蔦の葉」がかたどられています。



6 オナリノマ(八畳)とツギノマ(四畳)

オナリノマ(御成りの間)は他の部屋より床が一段高く、「上段の間」ともいいます。繊細な組子欄間があり、柱も細く、京風の上品な作りです。藩主などが泊まる特別な部屋で、ツギノマ(次の間)には警護など、お側仕えの人たちが控えていたのでしょう。佐賀藩十代藩主、鍋島直正を迎えるため、文久元年(1861)ごろに増築されたと思われます。



大庄屋役宅
(公的スペース)
豪農の私宅
(私的スペース)

7 瀟園

前田家の庭園は、水の景を楽しむよう工夫された池泉庭園でした。「溜水」と呼ばれた伊万里川から水を引き込み、その流れを楽しむ庭で、流水鑑賞式庭園といえます。基本は座ってながめる観式庭園ですが、飛石や石橋で園内を散策できるようになっているので回遊式庭園との折衷型といえます。

佐賀出身の学者で寛政の三博士といわれた古賀精里が「瀟園」と命名しました。東側の竹の生垣が「緑竹滴々たる」より命名したといわれています。寄せては返す波のように躍動感にあふれた竹垣のある庭という意味でしょう。

庭の主木で景の中心となる正真木は楠です。朝日がこぼれるように工夫されていた寂然木は庭のシンボルでもある竹でした。西日が葉を美しく照らし、西日をささぎる夕陽木は楓です。そのほかの花木が、四季折々の風情を醸し出します。

水路には川原石で護岸を組み、座敷から見ると、中嶋の向こうに三つの岩を島状に配して、池中の三島、すなわち不老不死の仙人が住むという蓬莱山をあらわしています。園路には灯りのための石燈籠を要所に配し、屋敷地の守り神である稲荷大明神がまつられています。

